

断絶

武蔵野こしすつ(18) 海野 弘
オープン・セットの街で 武山 博
遙かなる空の彼方に 五十嵐 泰
二度目の結婚 吉田 善徳
シルバールーム・桜(6) 政所 里子
身辺雑記抄 小松 文木

107

平成22年10月

●「断絶」107号(東京都)

「断絶」はベテラン揃いの、このある雑誌で、文章は練達の士が並んでいる。文章は手堅く、右顧左眄しない一つの覚悟が感じられる。古色の文章のなかに、骨のようなものがとおっている。ここまで文章が徹底していると、「断絶」という言葉をなぜ雑誌のタイトルにしたか、その由来を想像したくなる。下の世代との断絶を一つの姿勢と覚悟したか、社会への広がりを感じ、初から無視したか、いずれにしても筋金入りの強靱さを感じる。

なかでも五十嵐崇の「遙かなる空の彼方に」は、文章の彫りは深く、岩肌を感じさせる骨張った文体は、抑制を徹底させたなかに象徴された人間の復讐劇が、一つの超越と自然への高次の領域での同化が芸術を手段として達成されるドラマを内蔵していて、最後まで読ませる。絵の造詣も深さを感じる。恩讐を超えた芸術の極致はたしかに触れているが、ただ惜しいのは、最後が急ぎ過ぎていて、あまりに簡単に超越的な領域に到達しすぎる。芸術には表現としての苦悩もあるはずであり、その試行錯誤の苦しみの果てに到達するものが自然で、そのあたりのスプリングボードなしに一気に天上には行けないのではないだろうか。それにしてもこの彫琢は並々ならぬ修練の上に実現するもので、彫りの深さは骨太さに通じている。

「オープンセットの街で」(武山博)も単なる船旅のレポートに終わっていない、視点の幅を感じるのも、普段から鍛えられている文章の編み目がしつかりしているからだろう。ピースボートと想像される、若者といっしょに世界の問題を考えながらの長い豪華な船旅が、注意深くよく観察されていて、なるほどと納得させられることがしばしばである。連載の雰囲気もあり、おもしろいレポートになっている。

「断絶」には他にも「二度目の結婚」(吉田善徳)「シルバールーム・桜」(政所里子)などの連載があり、総じて長編の息の長い筆力が目立つが、どれも手堅い筆致で隙のない文章の流れを作っているのが、雑誌の一つの格調の高さにもなっている。

●「文学岩見沢」81号(北海道)

地道に市民文芸の活動を底広く続けている文芸誌で、昭和四〇年から続く四〇年の営為は賞賛に値する。遅ればせながら祝意を送りたい。この詩は幅広いジャンルで、俳句、短歌、随筆、童話と多彩な賑わいを見せながら、その頂上は高く、注目すべき作品がレベルを引き上げている。

連載二回目「市来知の決闘」(こうでんじつ)は、第一回目にも注目したが、今回もそれ以上の興味深い内容で、記録的価値の高い史伝を含みながら、文学の

文学岩見沢

第81号 2010.7



文学岩見沢の会

彫りとふくらみの豊かさを示して、価値あるものを提出している。前回は明治初期の九州の武士の反乱を描いて、その詳細さに感心したが、今回は鎮圧された多数の反乱者たちを国事犯として内地に収監しきれずに北海道の市来知に開拓を兼ねて新しい収監施設を造ったという、成り立ちを明瞭に描いている。北海道の裏面史を抽出することによって、これまで描いてきた九州と北海道とが一つにつながり、スケールの大きな時空を構築した。これだけの詳述はどんな典拠を得ているのか、それ自体興味深いところだが、生半可な研究ではない土台の強固な拵えに、壮大な意図を感じる。極寒の収監所の様子や脱走の様子など、文学でなければ蘇生しえない術を見事に展開している。元新撰組組長永倉新八も登場して、興味を盛り上げ、剣豪の繋がりをあざなっている。後半は宝来又兵衛の四天流など幕末から明治の地方の剣術と剣豪の流れに重ねて、市次郎の剣術修行を筋よく描き、決闘への興味を盛り上げている。次回が楽しみである。

同人誌には、優れた歴史小説がある。現代の社会相だけが華やかな脚光を浴びるが、過去をしつかり掘り起こして現代の背後に隠れた歴史層を確実に捉えておくことも重要な文学作業である。歴史小説や記録の分野に光を当てる推奨が樹立されるべきだと思う。

「家族写真(一)」(樽井英介)も北海道岩見沢の「倉澤写真館」の歴史を通して、過去に遡及する粗筋が骨格で、その点では歴史性に通じる性格を帯びている。同級生が召集前に結婚してその記念写真を写真館に頼みに来るというのは当時としてはよくあったことだろうが、いっしょに東京に行つて三月十日の東京大空襲に遭うというのは、読ませる展開。私も東京空襲については、読んだり聞いたたりしているが、ここまでのリアルな詳述はあまり出てこない。テーマや組み立ては平凡と言えは平凡だが、その誠実な姿勢と材料を素直に受け止める態度は好感が持てる。

「推定無罪／その夜の話から」(藤川とみ枝)は、夢

遊病の中で大金を持ってきてしまっただしは、興味津々。展開は推理小説の吸引力十分で、主人公の出生を探るもう一つの流れと絡み合っておもしろいのだが、結末が碎けた。せっかくの筋立てが台なしの、いかにも日常の平穩に落ち着かせる逃げを打っている。推理を組み立てて行く力は十分あるので、何を組み立てていくかを熟考して書いていくべきだろう。大綱をひろげながら、得た魚は小ものである。

「冬の鳥」(寺田文恵)は、文章のリズムは生きていて、生活感も豊潤だが、素材が今回は貧弱。他人事のように感じられる。エッセイのなかでは「虫送り考」(小林英輔)、「丸帯の謎を解く」(多田美佳子)、「あったかい」(岡嘉彦)が、味深く楽しませてくれた。

●「時空」33号(東京都)

文芸評論家菊田均が主宰している同人誌。六二頁と薄手ではあるが、内容のレベルはさすがに高い。

「桃」(平野潤子)は、「生きにくい」自殺願望を持つ男女「卓朗」と「私」の二人の共通項は「母から愛されなかった」ことだが、その生き方の根深い基盤をめぐってのドラマが緊張感を持って進んでいく。老齢で認知症症状の進む母親が差し出す桃を拒否するわだかまりが、一点の朱のように作品に鋭く落ちていく。結晶度の高い好短編で、読後感も濃く残るが、自殺願望のもっと深い世界や、生きにくさのやるせない現実との接面をもっと掘り込んで書けば、さらに迫った作品になっただろう。筆のじつくりした落ち着きが、もっとこの世界の深さを広げ得たかもしれない。筆の角度のよさは鮮やかなものがあるだけに、惜しまれる。この作品は、優秀作に推すべきか、準優秀作とすべきか、読み手としては迷うところである。資質は前者、作り方は後者であるが、今回はあえて量を含めて次作に期待することにした。

「タワ」(福島弘子)は、老年女性の過去の男女間のこたわりが、空に屹立する東京スカイツリータワーの風景のように、記憶の霧から立ち上がってくる生の

回想がよく描かれている。これは、死の近づきを前にして初めて見えてくる回顧であるし、生へのいとおしみでもあるだろう。淡々とした筆致のなかに現れてくる春への振り返りは、艶を帯びて回帰を光らせている。菊田均の「歴史徒然／阿部正弘」はペリー来航時からの筆頭老中の仕事をよく分析して、阿部の有能さを冷静に評価している。資料に基づいて普通は振り返られない歴史の一断面を正確に切り取っている包丁さばきは、的確だし、幕末を別な角度で新鮮に提出してくれる。ペリーが来航一年前にすでにそれを予告していたことは初めて知った。このことはもう少し詳しく書いてほしかったものの、歴史をやや斜めの視線から怜悯に見ようとする筆者のペン先の意味はよく伝わってくる文章になっている。

●「果樹園」15号(愛知県)

「果樹園」はあたたかみのある誌で、代表者渡辺康充氏の息に、包み合う温もりのようなものが感じられる。最後の頁「独り言」と題した文章に「同人誌は生き物だ。同人同士支え合って生きていきたいと思う」と見られるように、何かを汲み取ろうとする思いやりのようなものが匂う。それが誌全体の明るさに繋がっている。「受贈誌御礼にかえて」として各受贈誌の感想を丁寧、肯定的に書いているのも、その姿勢の表れだろう。心遣いがある。

巻頭の「みみず暮情」(今泉佐知子)は、要介護度3、身体障害者3級の夫を抱えての生活に、明るい光が弾んでいる。みみずにちなんだ話や古典作品、詩作品を点綴しながら、二つに切られてもそれぞれが再生するミミズの生命力に重ねて、様々なものの再生を信じる希望の明度がさわやかさを生んでいる。どこまでも土に根ざした逞しい命を信じ切る気持ちだが、軽い文章を不思議に躍動させている。異色の小説だが、溢れる魅力が備えている。これも優秀作に推すか準優秀作に挙げるか、迷うところではある。

「真珠湾の逸機」(平田超人)は攻撃準備訓練や、

真珠湾までの艦隊の行動など細かく調べて臨場感いっぱい描いている。一気に読ませておもしろかった。しかし真珠湾攻撃は「一波だけだった」とする見解を確かめてみると、服部卓四郎「大東亜戦史」では、「二波も行なわれた」となっている。私の記憶でも二波はあったと別な本でも読んだ記憶がある。三波はなかったのだ、おそらく第三波を繰り出すべきだったとする見方を拡大したものと思われるが、肝心なところで正確さを欠くのは、小説全体の信頼を損ねて惜しまれる。源田実と淵田美津雄の同期の絆はよく描かれていた。

●「カム」6号(奈良県)

この誌はしたたかな書き手が揃っている。関西風のバイタリティ、吉本興行ふうの勢いが感じられる。

「刻印」(阪井智二)は不況の企業を舞台に、その中で乾燥した労働世界がモノクロの暗い映像感で描き出されている。虚無感を伴った筆致は、硬質で、ある諦念を帯びている。「物言わぬ資材に囲まれていると、自分まで言葉も失った物の一部になったような感じがしてくる」といった叙述は、説得性がある。他社営業の栗本や、課長は、よく描かれているし、恋人との倦怠感を伴ったどこか投げやりな関係もいい。「営業の言葉」を信じてはいけない」など、不況から来る深刻な社会状況が一つ一つの言葉や描写にしつかり込められていて、現代の企業の一部の内部空間をよく伝えている。



タイトルはわかったようなわからないような、焦点がもう一つ結ばれていない恨みが残る。

「凍てて凍てつくイティテ」(宮内はと子)は、調子よく連なる言葉の連射があり、これが独特の言葉の過剰感からくる多弁の流れを作っており、バイタリティを感じさせる。この作品も「刻印」のような企業内部を描いているが、年配の女性の立場からパワフルに進められているのが対照的。ただ、やり過ぎで、最後生産ラインに上司を突き落としてしまう終わり方は劇画調を否めない。ボンボンした調子が魅力であるものの、肝心なところが調子に乗り過ぎて説得力を損ねてしまったのは惜しまれる。

「掛けまくも畏き」(菅原瑞祥)もバイタリティを感じさせる文体で、宗教が下町風の生活の中に存在感を持つてくる意表を突いた結末も、不思議なりアリティがある。

●「習志野ペン」90号(千葉県)

「習志野ペン」は賑わいのある誌。三十数人が書いている。普通は賑わいだけでは九〇号も続かない。幹になつてゐるのは、やはり強靱なもので、編集長寺岡吉雄氏の編集後記を読んで頷かされた。「戦争も飢えも貧乏も失業も知らずに日本の復興期の恵まれた条件の中で育つたエリートたちが、この国を指導している。そうした人たちは、外国のそれぞれの宗教や多民族や異文化の中で国と国同士が血で血を洗う紛争を繰り返しつつ、国内でも経済的格差の激しい条件に耐えて切磋琢磨しながら、揉まれに揉まれて成長してきた海外の強者たちに伍して闘い抜ける資質があるのだろうか。甘い人生しか知らない戦後生まれの日本人に、果たして勝てる可能性が残されているのだろうか」「私自身は人生の終点が近いのに、未だに戦争に突入した愚かな帝国軍人を許すことができないし、肌の色の違う日本人だから原爆を投下したアメリカを心の底では憎んでいる」という率直な吐露はその根の確かさを映している。

作品は「UAE駐在奮戦記(三)」(ジャンボジェット機就航〜)(畔蒜正雄)が興味深かった。JALだろうが、一九八〇年前後のアラブ首長国連邦に駐在する航空会社社員の仕事を描いたもので、DC8からジャンボ・ジェット機へ移行する時期の様子が生き生きと書かれていて、学ぶことが多かった。インド映画もかかるアブダビの映画館の様子や、デルハムとドルという通貨の両替や、就航のための事務所の設置など異国ならではの不思議さや苦労が強いアリティで迫ってくる。「アブダビードバイ間の道路の舗装の厚さは約一メートルと聞く。厚くしないと溶けてしまい道路としての用が足せない。真夏ともなると五〇度C以上に達する。新聞は五〇度Cまでしか気温を表示しない」など強烈な現実が、次々に展開され、優れたポルターージュにもなっている。会議のためにギリシャのアテネで幹部同士が会うが、そのときの見聞や情報収集も鋭く、現代に繋がるものを示唆している。「ギリシャは……労働組合が強く、労働者は国からいろいろな面で保護される政策がとられている……なにしろ、国民の四人に一人は公務員だそうだ」というところは、確かに最近のギリシャの国家財政破綻の構造が透視される。小説的な心理劇は乏しく、むしろ記録性に強くなりかかっているものだが、実際の航空会社の駐在員はこのように苦悶して空路を切り開いてきたことがよくわかり、意義のある文章になっている。

また「軍艦開陽と平左衛門」(河上等馬)も幕末の幕府軍艦「開陽」の乗組員だった祖父についての記述で、艦隊が品川から蝦夷へ向かった経緯にも触れられていて、榎本武揚の考え方も浮き彫りにされている。身近な立場からの歴史を残すことは価値のあることで、文学の立脚点の一つはここにあることをよく示してくれる。蝦夷(北海道)が新政府の開拓事業と結びついていく胚珠が、この行動の中にすでに含まれているその視点も与えてくれる濃縮度の高いエッセイとなっている。



●「九州文学」533号(福岡県)

第四回富士正晴全国同人雑誌賞大賞を受賞しての号。心から祝意を送りたい。変わらぬ充実した内容は立派である。

歴史小説「謀殺」(興膳克彦)は、九州征伐の後、秀吉から豊前一八万石を与えられた黒田官兵衛のその後の物語。秀吉に「自分の後、天下を狙う者は黒田官兵衛だ」と言わしめたその牽制とかわしの緊張感のなかに展開して、読み応えのある作品に仕上がっている。官兵衛の知略と策謀の巧みさや戦国武将のプライドや中央の秀吉の思惑とそれをめぐる駆け引きが渦巻いて、戦国末期の様相が鮮やかに浮かび上がってくる。最後は伝統武家の誉れ高い宇都宮鎮房を城に招待して謀殺するのだが、その冷酷さも含めて、よく戦国の現実を切り取っている。久々に香りの濃い歴史小説を堪能した。もし同人雑誌に歴史小説の部門賞があれば優秀作に推したい作品である。福岡という地に足つけた立脚の確かさという点でも評価したい。

同じ歴史小説「流転の槍―安田作兵衛の生涯―」(西津弘美)も力作でよく歴史の流れを追っているが、知られている歴史的事件を一人の槍の使い手によって点綴しているような総括的印象が否めない。これだけたくさんの重要事件に関与している武士も少ないだろう

が、逆にそこに惚れ込みすぎて、個人の内面を真下に掘り進めていく心理の深さへの手がおよそかになった。華やかな素材は、それに手を奪われる危険があることを注意して素材をいつそう腰を落として扱うべきだろう。

「青いマスカラ」(蘇芳環)は、都会に出てきて生活を始めた若い女性の自立の苦闘を軸に、故郷と憧れと現実とが錯綜して、素直な展開になっている。海を感じさせる青いマスカラの描写はフレッシユで、そこに故郷と自然が象徴され、憧れが投影されるところにみずみずしさがある。ところどころにまっすぐな感情を突き上げてくるものがあるし、最後まで率直でいい。レナという人物が光っている。ストーリーが同人誌によくあるパターン化された安易さを残している部分もあるので、その点を、手を緩めないで全体を斬新なものにしていくにはどうしたらいいか工夫してほしい。

「モヘンジョ・ダロ文書」(江口宣)は考古学の謎を孕んだ挑戦的力作と思える。まだ第一回なので判断しにくいだが、考古学に足場を借りた推理小説の緊張と深さがここに現れるか、注視したい。万葉仮名まで出てくる拵えは相当規模の大きい構想を備えているはずで、どんな展開になるか楽しみである。

●「北斗」571号(愛知県)

「闇の中の種馬」(高田杜康)は異色作品。空想未来小説でもあるが、妙なところにリアリティがあり、不思議な雰囲気を出す。最初の町の通りの風景からエキセントリックである。「店先には日常雑貨用品や衣服は言うに及ばず、女性の色とりどりの下着がこれみよがしに積み上げてあったり、使い古した義足や勢力増強剤が路地にはみ出すほど所狭しと陳列してあった」「豚のしっぽや足首、鶏の脳味噌、まだ生きているすっぽんやまむしも陳列してあり、人間の食欲が動物的本能に直結しているのをまざまざと通行人に見せつけた」など、日本ではすでに存在しないような通りの風景でありながら、不思議にどこかにありそうな存

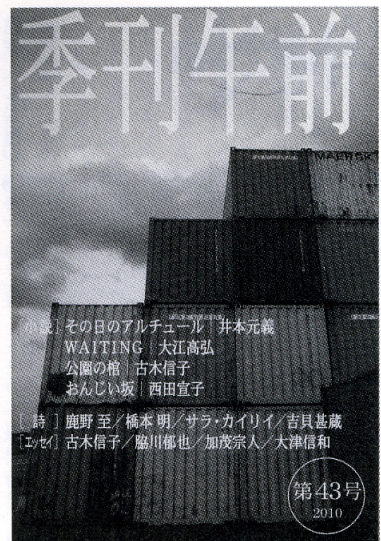
在感で迫ってくる。「人種改良協会」に属し、指定された旅館で精子を必要とする女性と寝る「種馬」としての精子の射出が仕事だが、しだいにそれに造反したい欲求が頭をもたげてくる。恋愛感情を抱いていない相手と脱走を図るもの、すぐに掴まって女性は死刑自分もそうなりそうになってもおかしくないところへ結局救われて、また種馬としての日常に戻る。「人種改良協会」といういかげんしい団体に、否定しきれないリアリティと魅力がある。SF空想小説の領域に足られるが、つい読んでしまう吸引力は、遺伝子の解明が進み、人ゲノムも日本人はすべて解析に成功したという新聞ニュースがあったり、iPS細胞の発見によって人間という種のありようが根底的に問い直されている時代の流れと連動したものであるからだろう。

清水信氏の「ひたすら書いた人たち」21/中蘭英助の人物伝は、「親友の敬愛した人物像を、その文学作品の中から選び出して、紹介する仕事をしたい」という意図の下に書かれた文章だが、引田春海、横山三郎、榎本武揚、幸徳秋水に触れながら展開される筆は、日本の近代史を剔抉する鋭い切れ味を見せている。詳細に立ち入りつつ閃かせる批判の刃は、清潔な深いきらめきとなって、歴史に刃跡を残すと同時に、快い刻印を読者の胸に残す。氏の批評の基底を窺わせる鋭利な輝きを放っている。

●「季刊午前」43号(福岡県)

いつも斬新な企画のある「季刊午前」だが、今号は落ち着いた雰囲気、穏やかなたずまいになっている。しかし瀟洒な持ち味は変わらず、理知的な匂いは、この誌の質を特徴づけている。

「その日のアルチュール」(井元元義)は、田舎に戻った天才詩人ランボーの生活断想に、時代や詩人などの回想を重ねて、詩の雰囲気香りをよく立ち昇らせている。しかし肝心な詩の創作の噴出する(あるいは噴出した)エネルギーには、触れていない。その秘密を



こそ知りたい。ランボーへのノスタルジックのようなものに終始して、その像と軌跡をなぞるだけになっている観がある。ランボーを知らない読者が読んだら、もう一つ結像しない物足りなさを覚えるだろう。ランボー・ファンとしてはもっと乱暴な筆致でその激しい行動や詩作や狂気に迫ってくれたほうが、詩人の人間に肉薄できたのではないかと想われる。砂漠へ向かう死の未来をもここに光として射し込ませて詩人の行動の宿命と狂気を浮かび上がらせる方法もあったかもしれない。

連載歴史随想「長崎、さんた丸や/雪のサンタ・マリア」(加茂宗人)は、今回は「雪のサンタ・マリア」という一枚の絵をめぐる随想だが、厳しい弾圧をくぐり抜けての信仰がその背景として陰影深く浮かび上がってくる。一つのテーマをこのように追い続ける一貫性は、何か大きなものに結実する期待を抱かせる。連載第何回と明示せず、あくまで歴史随想として柔軟に、自然体で書いていく態度にも、密かな熱いエネルギーが感じられ、むしろより大きな総体が想像される。ここには、日本の民衆と信仰の問題が横たわっているだけでなく、信仰の本質と世界性に及んでいく、現代にもつながる深い問題が垣間見える。

「公園の棺」(古木信子)は、進行性の筋萎縮性の妻を介護する夫の視点で描かれた小説だが、マンション

から見下ろす公園に、妻が様々なイメージを重ねるその像がいい。公園の噴水を葬式の祭壇に見る妻の想像力の中に、未来とあのせつなさが象徴されて、設定はすばらしい。文章もこのテーマに合っていて、淡々とした柔らかな筆づかい、病気の進行と死を見つめる運びを深めている。しかし後半、物語を収束させる盛り上がりで失敗して、結果的には凡作になってしまった。子供にプレゼントするものはそれが受け取ってもらえるかどうかは別に、死を賭けたもつと重大なものであるべきで、最後にもう一度噴水をしっかりと葬式の祭壇として高く立てて輝かせて死を迎えるものにしなければ、タイトルが生きてこないだろう。終わりのほう三分の一が腰が折れてしまっていて、せつないくいいところまで行っているのに、あまりにも惜しい。死を前にした者の想像力の意味をもつとしっかりと捉えるべきだった。いまからでも書き直すべきだろう。

●「仙台文学」76号(宮城県)

今号は充実している。読み応えがあった。

長編小説「氾濫」(佐々木邦子)は第二回目だが、期待通りの展開で、北上川の氾濫を軸に幕末から明治への農民の苦闘を生き生きと描いて、筆が躍動している。今回はタカが栄吉という有力農家の男の妻になる過程を中心に物語を展開しており、明治政府の大胆な治水計画と水域農民の大きな犠牲も点描されながら、東北農民の生きていく姿が深い吐息のような息づかいとともにうねり動いている。しかし今回は男と女の新たなつながりを主軸としたためか、農民の貧しさの強烈なエネルギーはやや後退した。それは栄吉が土地の有力者であり、そちらにスタンスが移ったためかもしれない。この小説の大きな力は、氾濫のなかにお生きる農民の強烈な生命力なので、それだけは踏み外すことなく物語を展開してほしい。これだけ詳しい、地を這う文章は何かよほどしっかりした典拠があるか、聞き書きのストックがあるかと思われるが、筆先に宿ってくる魂の声を尊重して書き進めれば、これまでに

ない農民小説になるだろう。筆に集まってくるその声を信じて、それに委ねることが大切と思う。北上川の流域に、今でも犠牲になった無数の農民の死体が眠っている事実を大事にして進めていってほしい。

「旅立ち」(渡辺光昭)は、父親と喧嘩をした中学生と祖父がいつしよに家出をするストーリーで、しっかりと組み立てが説得力がある。隅々までよく行き届いた構築は、読み終わった後の好感に繋がっている。最後、孫が万引きして呼び出されるシーンも不自然でない盛り上がりで、家に帰る意志を無理なく立ち上げている。佳品。

歴史小説「白鳥の維新」(安久澤連)は官軍が土地では神聖視されている白鳥を撃ったので、それに警告を発するために放った銃撃で、藩の重役が処刑される話で、丹念に調べてあって明治維新の東北での一面がよくわかるが、この題材の中に何を盛り込むかということになると、やや小粒な題材だけにそこに別出する手際はきわめて難しいものになる。事故と不運で終わってしまったいいものか、難しいがもう一つ何かがある気がする。

ちょうどそれに関連した話を含んでもう少し大きな流れのうちに見たものが「火の身ならば―仙台維新後夜譚―」(牛島富美二)である。スケール大きくわかりやすく書かれていてさらに緻密で読ませるが、仙台

藩が最初新政府寄りの立場にいたのに、やがて奥羽列藩同盟に加わり、維新政府軍と一戦を交えることになる、変節する肝心なところが書かれていず、短く飛ばしているような印象がある。ここを詳しくしてがっちり作ることが抜けてしまった印象があるのが残念。しかし全体に奥羽地方の明治維新への対応がよくわかり、どのように新しい流れが浸透していったのか、理不尽な歴史の一面も含めてよく浮かび上がらせているのは、功績に思える。

●「半獣神」89号(大阪府)

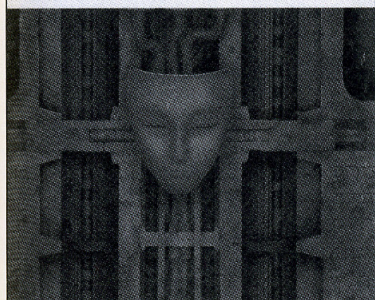
杉本増生氏が編集する「半獣神」は誌名のとおり個性の強い句いを放っている。巻頭に長いレポートを持つてくるのもすでにユニーク。「随筆」としてあるが、三〇ページの長い作品はすでにこれだけで「随筆」と言えるかどうか。報告文のほうに合っているかもしれない。「山中湖文学の森・三島由起夫文学館/開館一〇周年記念フォーラム」に行つて(安芸宏子)はゲストの横尾忠則とドナルド・キーン(ドナルド・キーン)の講演と質疑の内容をつぶさに記している。よくここまでと思う細かさで、「横尾氏は、三島と自分の似ている三つの点として、土着嫌悪、ブラック・ユーモア好き、手首が細い」ということを挙げた」などおもしろい内容を伝えていく。ただ、三島の作品の個人的な論評になると強引すぎる面が目立って、興を削ぐ。「春の雪」の時代設

仙台文学



76

半獣神



2010.6. VOL.89

法螺 63



枚方文学の会

定は確か明治（大正か）。だが、惑わされてはいけない、ここに顕れているのは平安時代だ」と断ずるようなところ、安易で説得力に欠ける。また三島由紀夫を終始「三島由起夫」としているのは、誤りを超えて何か意図があるのかと思わせるほどのミス。書き込む情熱がすべて空回りしてしまう。残念。

「骸御前」（佐藤駿二）は怪奇小説で、背筋がぞつとする迫真性を備えている。旅の宿を借りた絵師が、主の死んだ妻を絵に描く物語で、異教と流行病を絡めて無惨な死の末路をこの世に蘇らせる粗筋は吸い込まれる。ただ戦慄を覚えさせる最後、ダメ押しで読者を昇天させてはしなかった。絵師もその流行病にかかって全身がみるみる黒くなっていくとか、夢の場面をそこに流れ込ませて夢と最後とを深く関連づけるとか、とどめを刺してはしなかった。江戸川乱歩の「人間椅子」の恐怖を覚えさせるその手法など持ち込んで、盛り上げれば、それは可能なことだと思う。この分野での才能は豊かな作家だと確信する。

●「法螺」63号（大阪府）

「法螺」は一〇〇ページほどの雑誌だが、中身は濃いや。レベルの高い書き手が多くて、豪傑集団のようなイメージがある。コラムも冴えていて、どこを切つてもぎつしり詰まっているおもしろさがある。

巻頭の「もし……」（曾根登美子）は変則的なタイトルだが、死に瀕した一人暮らしの老人が、捨て猫を拾い、それを救ったの共感のなかに、生きる力をもたせていくストーリーで、老人の孤独が子猫によっていつそ鮮やかに浮かび上がってくる好短編。ずっと独身だった一生を振り返って、見合いをして結婚しかかったときの回想「いい歳をして、濃い化粧をするなんて、みっともない」という一言で相手をいやになった話など、おもしろい。「あの子猫のために私は生きたい」という言葉は猫のような小さい命であっても、命の共鳴というものはたしかにそういうものだろうと、納得させられるものがある。佳品。

「怨——西南役奇譚——」（西向聡）は出色の歴史小説。

西南戦争の事情と、その後の大久保利通暗殺への経緯が手に取るように活写されている。征韓論に敗れて帰郷した西郷隆盛を追って警察を排除して集まった浪人たちが、西郷を慕って参加した若者たちなど、「私学校」の成り立ちとその動静が生き生きと描かれている。政府の火薬庫からの搬出に腹を立てそれを奪う若者たちの軽挙によって、西郷が立たざるをえなくなる過程なども、脈打つ文章によって鮮やかに浮かび上がらせている。鹿児島へ向かって組織された西郷暗殺団の挙動なども、詳細にわたっている。さらに西南戦争後生き延びた「私学校」の残党によって脳味噌が出るほどに頭蓋を斬りつけられた大久保の最期も、一つの「怨」のうねりによってみごとに繋がれている。歴史の裏面を描くことで歴史の深淵をも感じさせる。筆者の手腕の光る歴史小説の優秀作。

■今回は歴史小説の優秀な作品が目立った。代わりに現代を素材にした小説はトップレベルがやや寂しかった。長編小説部門の優秀作は「氾濫」（佐々木邦子）／「仙台文学」76号、短・中編では優秀作はなく、準優秀作は「家族写真（二）」（樽井英介）／「文学岩見沢」81号、「桃」（平野潤子）／「時空」33号、「みみず慕情」（今泉佐知子）／「果樹園」15号、「骸御前」（佐藤駿二）／「半

獸神」89号、「刻印」（阪井智一）／「カム」6号、「UAE駐在奮戦記（三）」（ジャンボジェット機就航）／「畔蒜正雄」／「習志野ペン」90号、「青いマスカラ」（蘇芳環）／「九州文学」533号、「タワー」／「福島弘子」／「時空」33号、「公園の棺」（古木信子）／「季刊午前」43号、「旅立ち」（渡辺光昭）／「仙台文学」76号、「もし……」。

（曾根登美子）／「法螺」63号である。

また歴史小説の優秀作は「市来知の決闘」（二）（こうでんじつ）／「文学岩見沢」81号、「謀殺」（興膳克彦）／「九州文学」533号、「怨——西南役奇譚——」（西向聡）／「法螺」63号の三作。さらに「歴史徒然／阿部正弘」（菊田均）／「時空」33号も付け加えたい。

それに準ずるものとして「遙かなる空の彼方に」（五十嵐崇）／「断絶」107号、「火の身ならば——仙台維新後夜譚——」（牛島富美二）／「仙台文学」76号も挙げておきたい。

今回は具体的に見つからなかったものの、同人雑誌の作品の中には、現今の芥川賞を超える優れた作品がある。壊れているのは、それを広く世の中へ掲げ上げるポンプの機能だと思う。「文芸思潮」の態勢もけつして十分とは言えないが、一つでも多くの優れた作品が多くの人々の目に触れるよう努力していきたい。

（全国同人雑誌振興会／五十嵐勉）



「文芸思潮」は東京ではジュンク堂池袋本店、紀伊国屋新宿本店、紀伊国屋渋谷店、書泉グランデ、神田東京堂で販売しております。

また富山でも紀伊国屋富山店で販売しております。よろしく御利用のほどお願いいたします。